

念を持って接することが出来ました。蔣總統の「暴に報ゆるに和を以って接する」という意向が、中国軍人や住民に了解されていたからでしょう。

南京城内の兵舎で抑留生活を終え、昭和二十一年五月十七日、米軍の上陸用船LSTにて上海出帆、二十三日博多上陸、二十四日帰宅することが出来ました。

高松市街は空襲により大きな被害を受けていましたが、私の家は大丈夫でした。家に帰り着き、私は八男であり、父や兄達と一緒に暮らしていましたが結婚後自立し、男児二人に恵まれ、幸せな生活をする事が出来ました。

駐蒙軍騎兵第四旅団

河南作戦、戦後の対共戦闘

岐阜県 山平 春重

大正十二（一九二三）年十一月一日、岐阜県益田郡

朝日村で兄弟妹八人の長男として生まれ、家は農業、家族一同健康でした。徴兵検査は昭和十八（一九四三）年六月、甲種合格で、農家の長男であり弟妹も多いので責任ある地位でした。

昭和十八年というと、戦争も連合軍に押されかけている時でしたから、男子の当然の義務として現役兵として戦地に行くことは覚悟を決めており、父母をはじめ家族も「家のことは心配するな」と言ってくれていました。

昭和十八年十一月一日、北支那方面軍騎兵第四旅団へ入隊、集合したのは大阪府の部隊で臨時に二日ほど入隊し、冬服が支給されたから多分寒い所だろうと予想しながら大阪港出帆、博多から朝鮮釜山へ上陸し、鉄道で山海関經由北支へ向かいました。しかし、やはり戦地だと感じたのは夜中、輸送の列車に対して射撃を受けたことでした。これは共産八路軍であると引率の下士官から言われました。我々は騎兵銃を持っていましたが、応戦することなく列車は走り続け、被害も無かったようでした。

帰徳駅の手前、部隊本部のある柳河で一時下車、帰

徳には騎兵第二連隊があり、我々は柳河の第一連隊、自動車第二中隊に入りました。通称号は「成第五三五八部隊」です。そこで三カ月間の初年兵教育を受けました。教育中に部隊は時々出動しましたが、我々は射撃の音を聞いただけで出動はしませんでした。本隊は応戦していました。駐蒙蒙軍は、八路军を相手に討伐や作戦に出ていたのです。

一期の検閲が終わると間もなく、雪が解け始める頃ですが、やはり内蒙古の寒さは厳しいもので、内地の飛驒で育った私にも寒さは身にしみるものでした。教育が終わってからは、柳河は第一線でしたから、共産軍の討伐には二、三日出かけ、弾丸の下をくぐる経験をしました。共産軍は、こちらが少数、弱いと判断すると攻撃をしますが、こちらが強いと逃げる戦法をとっていました。

しかし、その戦力は侮れません。その上、部落民から情報を取っていたので、こちらの状況は十分承知し

ていたとのことでした。

昭和十九年四―五月頃になると、重慶蒋介石軍の航空機が京漢線黄河の鉄橋を爆破したという情報を聞きました。一方、日本軍は河南省盩厔近の隴海線の鉄橋を爆撃したという情報もありました。

このようにして、北支、蒙古方面の作戦が開始されたのですが、私は入隊一カ月くらいでしたから詳しい状況は分かりませんでした。が、いよいよ大きな作戦があり、いつ出動するのかと班長や古参兵が言っていたので、私も作戦に出るのだなと覚悟していました。

河南作戦・京漢線打通作戦が始まり、私は車両部隊ですから、騎兵の馬がやられると兵隊を乗せて第一線へ出ました。糧秣、弾薬、病馬や負傷兵も輸送しました。

黄河を西へ、洛陽を落として、靈玉まで行きました。途中、黄河の河畔、田圃の中で、在支米軍機ロッキードP38、カーチスホークP51戦闘機の銃爆撃を受けました。四―五機編隊であったかと思いますが、我が軍の機関銃で二―三機を撃墜しました。

敵機は超低空、地上スレスレ、しかも田圃だったので、隠れる物は何もなく、石ころや草むらもないのです。無防備の我々を上から撃つのですから、低空で来たのでしよう。しかし我が機銃が狙い撃ちして撃墜したのですから、我々の仇を討ってくれたと、すっかり溜飲を下げたのです。

この河南作戦で、我が部隊の騎兵の犠牲はずいぶん多かったのですが、数頭の輓馬で重い砲を引いて来た野戦重砲隊は、この作戦で活躍し、堅固な城壁を破壊し、わが歩兵部隊が城内に突入出来ました。

仏像で有名な龍門も通り、開封の西鄭州近く、黄河の対岸で、中国軍戦死者の遺体を、野犬がガリガリかじっているのを見ました。我が軍では全遺体を収容し火葬にしていたことを思うと、同じ戦死でありながら敵軍の戦死者は哀れであると、つくづく思いました。

苦しい作戦、特に我々初年兵にとってはきびしくもつらい作戦行動でした。大陸の作戦はほとんどが徒歩ですが、私は自動車部隊なのでその点は良かったので

すが、自動車部隊は防御力がなく、空襲に対してもゲリラ部隊の襲撃に対しても犠牲が多かったのです。

兵科を問わず、長路の作戦行動、戦闘とも辛いことには変わりないことを、つくづく感じた次第です。私のような若い兵隊にとっては、この河南作戦（京漢打通作戦）のほんの一部、自分の行動した日々の苦勞しか分からず、どこをどう歩いたかさえ断片的にしかりませんが、一般の歩兵隊の人にとって作戦とは歩くことだと言われていましたが、これは実感しました。

北支方面軍の河南作戦の次のような日程表を見て、今、あの作戦はそうだったのかと日時をかすかに思い出しています。

昭和十九年五月九日、洛陽西方で黄河を渡河して進
攻開始

五月十日、北支方面軍重慶第一戦区主力（洛陽周
辺）撃滅作戦下令

五月二十五日、洛陽を攻撃

六月四日、靈宝（河南省）作戦開始

六月九日、北支方面軍、鄭州の戦闘司令所を閉鎖

十月十日、京漢鉄道打通

昭和二十年八月の終戦の連絡は遅く、すぐには終戦を知りませんでした。ただ、弾を撃ってこなかったことで、不思議に思っていました。終戦を知ったのは終戦一週間後でした。

終戦後の北支軍・蒙疆の中国軍は蒋介石軍と停戦協定を締結したので、武器は蔣軍に渡すことになりましたが、共産軍は停戦している日本軍に対し武器引き渡しを要求してきました。

私は旅団司令部に勤務していましたから、国民政府（蒋介石）軍対共産軍の関係や、日本軍が国民政府軍と交渉しているらしいことを、うすうすながら知りました。

国民政府軍は閻錫山將軍であり、その後、国共の争いの中に日本軍は巻き込まれてしまい、我々は共産軍討伐に使われました。我々は戦死してはつまらんと思いますが、国共戦に参加しなければなりません。

た。

犠牲になった騎兵もいました。騎兵は馬を持っているので、糧秣が無く、馬の伝染病もはやってずいぶん困りました。また、食糧にもこと欠いたので、地元の農民と物々交換をしました。衣料を食糧に換えて生活をしていました。

武装解除は帰徳でしたが、その後は中国軍が警備に当たっていました。帰国時、中国軍が徴発したものを上海で売り、責任者が刑罰を受けたということも聞きました。

帰国のための集結は、帰徳―徐州―浦口―南京―上海で十日間くらいかかり、昭和二十一年五月、上海から日本軍の海防艦に乗船し佐世保着。検疫を受け復員しました。